アジア・アフリカ地域研究 第21-2号　2022年3月
Asian and African Area Studies, 21 (2), 2022

書　　評

川口幸大・堀江未央編.『中国の国内移動―内なる他者との邂逅』京都大学学術出版会，2020年，310 p.

高山陽子 *

本書は2000年代以降，フィールドワークを実施してきた8名の文化人類学者による中国の国内移動に関する共同研究の成果である．周知のように，現代では中国が特有の戸籍制度を有し，歴史的には漢族が移動を繰り返しながら「中華」を拡大してきた．漢族の移動によって先住民である少数民族との間にコンタクト・ゾーンが形成され，邂逅から融合へ向かった例もあれば，武力を伴う軋轢から共存へ向かった例もある．本書の特色は，移動者の視点と受入れ住民の視点を意図的に交錯させながら，衣食住のレベルにおいてコンタクト・ゾーンで起こった／起こっていることに着目した点である．

漢族が移動を繰り返したといっても，それは一枚岩ではなく，商人のように他者との邂逅に慣れている場合と，農村出身で他者との邂逅に慣れていない場合がある．また，少数民族でも歴史的に漢族と接触し続けてきた場合や，ほとんど漢族と接触することがなかった場合もある．概していえば，コンタクト・ゾーンでの体験を繰り返してきた漢族と，コンタクト・ゾーンにおける軋轢を避けるかのように生活してきた少数民族はコントラストを成す．

国内移動の政治性に関する批判は，こうした漢族と少数民族の間の不均衡な力関係だけではなく，「民工」（都市で出稼ぎをする農民）の劣悪な労働環境，「支辺移民」（辺境を支援するための移民）や「生態移民」（生態系を回復させるための移民），「三峡移民」（三峡ダム建設に伴う移民）などの半ば強制的な移住政策に対するものなど多岐に渡る．ただし，歴史的な移動から現代的な移動まで，これほどの多様な移動の在り方がひとつの国の枠組みの中で分析できるのは，中国研究の強みのひとつである．この点を踏まえ，本書は各自のフィールド調査に基づき，21世紀の国家における移動の諸相を捉えようとしている．

では各章の内容を簡単にまとめたい．

序章「国内移動をいま論じる意味―中国と日本」（川口幸大・堀江未央）は，漢族の移動の歴史や戸籍制度と出稼ぎの問題を整理したうえで，コンタクト・ゾーンという概念を中国の国内移動の分析に用いる妥当性を述べている．すなわち，非対称な二者が出会い形成されたコンタクト・ゾーンで衝突が起こりながらも，ある期間を経ると両者の差異は適切な具合で残り，安定した社会空間を形成しうるという．

第1章「あんたがおれの百度だ―珠江デルタの『本地人』と『外地人』」（川口幸大）は，広東への出稼ぎ移住者と地元の人々の交流を扱う．改革開放の恩恵を受けた広州は，1980年代から香港や台湾からの移住者が多く，コンタクト・ゾーンにおける差異の存在

* 亜細亜大学国際関係学部

は自明になり，広東語が通じなければ共通語を話すのは日常的な風景となっていった．こうした「他者慣れ」の事例からコンタクト・ゾーンにはグラデーションがあると論じている．

第2章「都市を出る人，都市に来る人・戻る人―広東省の地方都市汕尾の事例から」（稲澤努）は，出稼ぎ労働者と香港帰りの人，汕尾の地元人が作り出すコンタクト・ゾーンを言語や食という側面から分析している．汕尾では，かつてもっぱら広東語と汕尾語が話されており，出稼ぎ労働者が話す共通語は見下されていたが，近年では共通語が広く使用されるようになった．また，四川出身者が増えるにつれて，辛い物嫌いだった広東の人々も，特に若い人を中心に辛い物を好むようになっていった．こうして使用言語による差別意識がなくなっていったという．

第3章「出稼ぎ先は『小さな国連』―浙江省義烏市に暮らすムスリムたち」（奈良雅史）は，「他者慣れ」の事例として義烏のムスリム商人を扱っている．義烏は，いわゆる百均のような安価な日用品の卸売市場が広がり，世界各地から商人が集まる国際的な商業都市である．広州ほど規模は大きくないが，多様な人々が集まり，その多様性を相互に認め合うところが「小さな国連」であると述べる．ここまでが沿海地域を扱った第1部である．

第2部は，第4章「移動の危険に対処する呪術―雲南ラフの男たちと出稼ぎ」（堀江未央）に始まる．出稼ぎに出たラフの男性たちが春節で村に戻ると，仕事の厳しさやカルチャーショックのみではなく，彼らが見た都市の漢族の印象についても話すという．漢族が意外にも「シャトッパ」（アニミスト）であるとか，男性たちが「口功」という呪術を用いて難を逃れたといった話が含まれる．本来，治療としての呪術であった「口功」が，出稼ぎ先というコンタクト・ゾーンの中で防御としての呪術に変換されたのではないかと分析する．

第5章「移動が生み出すトランス・エスニックな子ども服―雲南省から貴州省へ流通するモン／ミャオ族衣装と民族間関係」（宮脇千絵）は，貴州省で売られているミャオの子ども服を事例として，コンタクト・ゾーンの中で子どもの民族服がエスニシティを越えたことを論じている．観光化が進む西南の少数民族地域では，見栄えのする民族衣装が売れ筋であり，女性たちは自分の民族以外の衣装でも制作している．ただし，一般的に異民族の衣装を着るのは子どもに限定される．それは，子どもが社会的規範にとらわれない領域を作り出すためだとする．

第6章から第8章が第3部である．第6章「出稼ぎに行くのは甲斐性のない人―モンゴル人の移動と生活基盤」（包双月）は，ソーリ（基盤／甲斐性）という言葉から内モンゴル自治区の人々がコンタクト・ゾーンとしての出稼ぎをどのように認識しているかを分析している．遊牧を営んできたモンゴル人にとって移動は日常茶飯事であったが，出稼ぎは農地と家畜というソーリ（基盤）が足りないことを意味し，恥であるとみなされている．商売に長けた漢族のように成功すること

は希であり，都市へ行っても失業する可能性も高い．出稼ぎに対する否定的な価値は近年，ますます強まっている．

第 7 章「君たちは何をしている人なのか？—広西三江県におけるマカイ人の定住と地域社会」（黄潔）は，広西三江県の福禄江（現，溶江）流域において，マカイ人（客家）・トン・ミャオの 3 者が形成してきたコンタクト・ゾーンについて論じている．19 世紀半ば，客家が転入してミャオの住む土地を奪って福禄街を作り，土地を奪われたミャオは山地へ移住する．さらにミャオは出稼ぎに行ったトンの土地を奪い，トンは福禄街の周辺に集落を作る．こうした土地の争奪合戦があったにもかかわらず，トンはマカイ人の媽祖信仰とその祭祀を受容し，現在に至る．それはトンとマカイ人の通婚による文化融合の結果であるとする．

第 8 章「移りゆく『辺境』イメージ—上海から雲南への『支辺』移民の語りを通して」（孫潔）は，1950 年代から 60 年代の「支辺」（辺境を支援する）のために上海から雲南へ移住した人々の語りを扱う．「支辺移民」は，自らの選択は政治的に正しかったと思いながらも現在では上海へ戻りたいという思いを募らせる．一方で様変わりした上海に自分が馴染めないのではないかという不安も抱く．「支辺移民」の抱えるノスタルジーは空間的というよりも時間的な隔たりに起因する．これは多くの中国の年配者と共通するものである．

終章「『境界越しの邂逅』の持つ可能性」（堀江未央）では，COVID-19 の拡大の中での移動や中国研究における移動の重要性などを論じて，本書を締めくくる．

このように本書では，ほぼ全ての論考で出稼ぎが扱われている．ただ，「出稼ぎ移住者」「出稼ぎ移民」「出稼ぎ者」（第 1 章），「出稼ぎ労働者」（第 2 章），「出稼ぎ者」（第 4 章）など多様な呼び方をするのは，やはり分析する地域における出稼ぎの意味の違い，すなわち，出稼ぎを受け入れる側と送り出す側の違い，だと推測される．第 1 部の沿海部の事例は受け入れる側で，第 2 部・第 3 部は送り出す側である．この違いがコンタクト・ゾーンの在り方にどう影響するのかについても，今後，議論してほしい．

「出稼ぎ」の呼び方におけるバラつきのように，論集では各論において概念の扱い方に濃淡が生まれるのはやむを得ない．そのため論集の書評には，「各論は面白いが，全体としてのまとまりがなく，何を主張したいのか不明」という批判がしばしば寄せられる．編集担当者にとって，どこまで各論の内容に介入するかは悩ましい点であろう．もちろん，表記を統一するのは当たり前であるが，さらに，論の進め方や事例の提示方法などに修正を求めるのは難しい．論文執筆の作法は，各研究者が指導教官に論文指導を受けながら，長い時間をかけて培ってきたものである．論文指導は受けても，編集方法の指導は受けたことがない．ところが，研究者としてある程度のキャリアを積むと，突然，編集担当の任務が降りかかってくる．出版物である以上，読みやすさを最大限，考慮しなければならないが，各論執筆者への敬意も払わなけれ

ばならない．これは編集担当者のジレンマである．

解決法を示すのは難しいが，たとえば，各章のタイトルを統一させるのもひとつの方法だろう．第1章や第6章，第7章のタイトルが語りを引用しているように，他の章も同様に，第4章「本当のシャトゥパは漢族だった！」，第5章「何族のものということはない」，第8章「やっぱり上海に帰りたい！」のようにしてもよかったのではないだろうか．

長岡　慶．『病いと薬のコスモロジー――ヒマーラヤ東部タワンにおけるチベット医学，憑依，妖術の民族誌』春風社，2021年，399 p.

鈴木正崇 *

本書は，東ヒマーラヤのタワンに居住するモンパと呼ばれる民族集団の人々が，病気の文脈を通して，チベット医学の専門家や村の伝統的治療者，施薬師，僧侶などとどのようにつながり，薬や道具，神霊を媒介にして，病気の世界と自らの身体を連動させて生きていくかという実態を描く民族誌である．生活者の視点から現代における伝統医療の変貌を考察し，人々が経験する「病い」の意味付けや医療実践を幅広く論じている．フィールドワークは2010年から2016年まで断続的に行なわれ，言語はチベット語とヒンディー語に，日常会話としてタワン・モンパ語を使用している．

タワンは，北東インドのアルナーチャル・プラデーシュ州のタワン県に属し，中国との国境紛争地帯で，外国人だけでなくインドの人々の入域も制限される，著者も1ヵ月の入域許可証を現地で1ヵ月ごとに更新して調査を継続したという．調査の難しい地域での堅実なフィールドワークに基づく本格的な医療人類学の研究として評価したい．広義のチベット医学の医療実践を扱う必要性から，調査地はタワンに限定されず，ダラムサラ，サルナート，ダージリンなどを含むマルチサイト・エスノグラフィーの性格を帯びる．

構成は以下のとおりである．

序章
第Ⅰ部 チベット医学の開発
　第1章 チベット医学の制度化とアムチ
　第2章 チベット薬の標準化とタワンの人々
第Ⅱ部 ナツァの病いとチベット医学の実践
　第3章 タワンの暮らしとナツァの治療
　第4章 チベット医学の診療実践
第Ⅲ部 神霊と妖術における病いと薬
　第5章 神霊ルーによる病いと開発
　第6章 憑依と宗教薬
　第7章 毒盛りの妖術と民間薬
終章

第Ⅰ部では，チベット医学の制度化がインドでどのように展開したかという歴史的文脈と，制度化されたチベット医学とタワンの

* 慶應義塾大学名誉教授